

ルー・ポーイエの『マラヤ』を読み解く

篠崎 香織

はじめに

本論は、ルー・ポーイエ (Lu Po-Yeh/魯白野) が執筆し、1959年にシンガポールの世界書局¹⁾から出版された『マラヤ』を資料とし、脱植民地化と国民国家の創設が進展した時期のマレー世界において、ルーが自らをどのようにマレー世界に位置付けようとしたのか、また、自らを位置付けることができるマレー世界のあり方をどのように構想していたのかを探るものである。

ルー・ポーイエは、シンガポールを拠点に1948年から1961年にかけて、華語で小説や詩を執筆した作家であり、勤務先の『星洲日報』²⁾をはじめとし、新聞などで記事や論評を執筆したジャーナリストである。英語とマレー語にも通じており、マラヤとインドネシアの混成社会を題材とした小説や詩、随筆を華語で多数執筆 [篠崎 2022] するとともに、マレー語・英語・華語の辞書を編纂し、マレー語・インドネシア語の詩の華語への翻訳や、華語読者を対象にマレー語・インドネシア語文学の紹介を活発に行った。

『マラヤ』は、ルーが『星洲日報』や『中国報』³⁾など

で発表してきた文章を1冊にまとめたものである。ルーは『マラヤ』に収められた文章について、新たに生まれた祖国の呼びかけに応じ、大きな時代の激流の中に果敢に身を投じ、歴史の偉大な一幕を残すべく、ペンを執り渾身の力で怒涛の如く執筆してきたものと表現する [魯 1959, 序文]。『マラヤ』はまさに、言論によって社会の変革を試みることの有効性が強く信じられていた「カラムの時代」の産物である。

本論では、1章でルーの経歴を踏まえ、2章で『マラヤ』を貫く2つのテーマ——マレー人と華人の協力・共存を通じたマレー世界における平和の構築と、豊かで繁栄した社会を実現するための開発戦略を明らかにし、3章と4章でそれぞれのテーマについて詳しく論じる。

1. ルーの経歴

マラヤ、スマトラ、ジャワを流浪した少年期・青年期

ルーは本名をリー・ホックミン (Lee Hock Min/李学敏)⁴⁾といい、1923年4月にペラ州イポーで生まれた。祖先は広東省梅県の出身で、ルーは客家人であった。幼少期にはイポーから南に5キロほど離れたムンレンブ (Menglembu) で錫鉱業に従事する母方のおじの家にとことともに住んだ [周星衢基金 2019: 27]。1929年前後に一時期シンガポールに居住し、アッパー・ウェルド・ロード (Upper Weld Road)

卒業後は海南島と香港で勤務した。イポーやスレンバン、クボンなどマラヤで錫鉱山を経営していた父リー・クワイリム (Lee Kwai Lim) の事業を手伝うために、リー・ハウシクは1924年にクアラルンプールに移った。経済活動と並行し、スランゴール華人商業会議所 (Selangor Chinese Chamber of Commerce) の副会長 (1934年) および会長 (1939年) に就任したり、スランゴール広東会館 (Kwantung Association) の設立に携わったりするなど、華人組織の活動に積極的に関わった。日本占領期にリーはインドに逃れ、イギリスと中国国民党から大佐に任ぜられ、イギリスと中国の仲介役を担った。日本占領の終結後、マラヤに戻り、MCAの設立 (1949年2月) において主導的な役割を担った。また、スランゴールでUMNOとMCAとの連携を主導した。1957年から1959年まで財務大臣を務めた [Lee 2007; Ooi 2020]。

4) 李福民や李華と名乗る場合もあった [周星衢基金 2019: 27]。

1) 世界書局はチョウ・シンチュウ (Chou Sing Chu/周星衢) が1924年に設立した正興公司を前身として1934年に設立された [周星衢基金 2016: 53-54; 63-64]。華語学校向けの教科書の出版・販売に参入するとともに、中国で出版された文学作品の輸入・販売で事業を発展させた。系列の大衆書局の支店や代理店をクアラルンプール、ペナン、ジャカルタ、スラバヤなどに開いた [周星衢基金 2016: 64]。『マラヤ』出版時の世界書局は、サウスブリッジ・ロード (大坡大馬路) 205号にあった。

2) タイガーバームで知られるオー・ブーンホー (Aw Boon Haw/胡文虎) が1929年に創刊。タン・カーキー (Tan Kah Kee/陳嘉庚) が1923年に創刊した『南洋商報』とともに、1920年代から1960年代にかけてマラヤで最も広く読まれた華語新聞 [王 1998: 107]。1939年の時点で『星洲日報』の発行部数は朝刊と夕刊を合わせて5万部であった [沈 2013: 81]。ちなみに、同年の『ストレイツ・タイムズ』の発行部数は1万5,000部 [Straits Times 1953.1.18]。

3) 1946年2月にリー・ハウシク (Lee Hau Shik/李孝式, H.S. Leeと表記されることも多い) がクアラルンプールで創刊。唯一の華語新聞で左派的な *People's Voice* に対抗して創刊された。リー・ハウシクは、1901年に香港で生まれた。香港のクイーンズ・カレッジを経て、ケンブリッジ大学で法律と経済を学び、

に所在していたチュンナン学校 (Chung Nan School / 中南学校) に通った [Ng 2023: 18]。

その後イポーに戻り、ペラ公立ユックチョイ学校 (霹靂公立育才学校) で5年生まで学んだ。程なくして、父親とともにイポーを離れた。ペラ州内を複数箇所移り住み、ペナンとマラッカを経て、シンガポールに移った。

ルーはシンガポールで、1934年1月22日から1935年3月29日までラングーン・ロード・スクール (Rangoon Road School) で学んだ [Ng 2023: 18]。ラングーン・ロード・スクールは1924年10月に設立された政府の英語学校で [Rangoon Road School 1953: 19]、ファラー・パーク北側にあった。ルーはスタンダード6 (初等教育の最終年) の試験に合格し、同校を卒業した [Ng 2023: 18]。その修了証には、ルーは素行がよく、優秀で努力家との評価が見られる。また修了後にルーがジャワに向かうとの記載もある [Ng 2023: 18]。

ルーは父親とともに1936年頃にスマトラ島に渡った [魯 2019c: 24]⁵⁾。メダンにしばらく滞在し、カルサ英語学校 (Khalsa English School)⁶⁾に通い、7年生修了試験 (Seventh Standard Examination)⁷⁾に合格した [Ng 2023: 19]。

メダンに滞在していた間、ルーは、バンダルバル、ブラスタギ、トバ湖、シアンタールなどメダン周辺の高原地域にしばしば足を延ばした。またアサハンに1年滞在して教員を務めた時期もあった [篠崎 2021: 64-65]。

日本軍が1942年3月にメダンに進駐すると、ルーは父親とともにスマトラ島内陸部に避難した。ブラウレット、アサハン、アイルジョマンなど複数の場所を転々とした。この間、1943年秋に父親を亡くしている [篠崎 2021: 65]。

ルーは日本の降伏をブラスタギで迎えたのち、メダンに戻り、1945年から1946年に華語新聞社の記者を務めた [魯 2019b: 305]。その後、パレンバンを経てジャワ島にわたり、1946年11月以前のどこかのタ

イミングでイギリス・オランダ連合軍に入隊し、1947年9月に除隊した。同年中にルーはジャカルタの興華実験学校で教員となり、1948年のある時期までジャカルタにいたようである [篠崎 2021: 65]。

シンガポールに拠点を定めて執筆活動を開始

ルーは1948年5月までにシンガポールに移った。ジャカルタからメダンに向かうために乗船した船がシンガポールに停泊した機会に、シンガポールに住む父方のいとおばを訪ねた [周星衢基金 2019: 28]。しかし予想外にシンガポールで足止めされることとなり、それが結果的にシンガポールでの定住につながったようである。

このことについてルーは、『流星』に収録された「橋」という作品で、シンガポールを訪れた時にパスポートを紛失し、2カ月間交渉したが功を奏さず、国境という人為的な封鎖網を突破してスマトラ島に戻ることができなかったと書いている。ルーは、何もすることがない時はシンガポール川にかかる橋の上からスマトラ島ブラウンに向かって出航する船を一隻、また一隻と眺め、悲しみが果てしなく湧き上がってきたと回顧する [威 2016a]。

「橋」でルーは、メダンの街の美しさを描いている。デリ川の浅瀬の静かで美しい風景や、川沿いの紫竹の林としだれ柳、川沿いの道を自転車で駆け抜けていく健康的な美しい少女たち、秋になると通りに並ぶモクセイの木が黄色い花を咲かせ、モクセイの香りが漂う風景が描かれる [威 2016a]。また、ルーは、自身が流浪してきたインドネシアの大地は美しい自然にあふれていると書いている [魯 1970]。ルーのインドネシアに対する郷愁は、雄大で美しい自然とともに思い出される。

スマトラに戻りたいという思いをおそらくは抱きながらも、ルーは1949年にリー・ミーラン (Lee Mee Lan / 李美蘭) と結婚し、シンガポールで家族を設けた。ファラー・パーク地区のオーウェン・ロード (Owen Road) やレース・コース・ロード (Race Course Road) などを経て、1953年頃までにカトン (Katong) に居を構え、そこが終の棲家となった。ルーはここで5人の子⁸⁾を設けた [周星衢基金 2019: 28]。ルーは『実

8) 長女が1951年に、長男が1954年に、次女が1955年に、次男が1957年に生まれた。また妻の連れ子が1人いた [Ng 2023: 23]。次男リー・ウェン (Lee Wen / 李文, 1957-2019) はシンガポールに現代アートを打ち立てた先駆的な現代美術作家の1人として国際的に知られている。2005年にシンガポールのナショナル・アーツ・カウンシルが主宰する文化賞 (Cultural Medallion) を受賞した。

5) なぜ父親とともに複数箇所を渡り歩くことになったのか、母親との関係はどうだったのかについて、ルーは何も書き記していない。

6) 1931年にメダンのトゥク・ウマル通りにあるグル・ナナク・デヴ・ジ・シク教寺院 (Gurudwara Sri Guru Nanak Dev Ji) に併設して設立された。設立にあたりシク人カピタン (Kapten Orang Sikh) であったランジット・シンハ (Ranjit Singh) による寄付が大きかった [Zulkifli 2005: 16]。カルサ英語学校には Cambridge Local Examinations を受験する学生もいた [Pinang Gazette and Straits Chronicle, 24 March 1936]。

7) インドの教育制度に基づく試験のようで、上級初等教育の最終学年である7年生修了時の試験であるようだ。

表1 ルーの主な著作物一覧

著者名	タイトル	日本語訳	ジャンル	出版地	出版社	出版年	収録作品数	再編集版との対応
魯白野	獅城散記	シンガポール雑記	随筆	シンガポール	世界書局	1953年9月	56作品	『獅城散記——新編注本』周星衢基金、2019年
魯白野	馬來散記	マレー雑記	随筆	シンガポール	世界書局	1954年9月	56作品	『馬來散記——新編注本』周星衢基金、2019年
魯白野	馬來散記	マレー雑記	随筆	シンガポール	世界書局	1954年10月	26作品(9月版を分割)	『馬來散記——新編注本』周星衢基金、2019年
魯白野	馬來散記・続集	マレー雑記・続	随筆	シンガポール	世界書局	1954年10月	30作品(9月版を分割)	『馬來散記——新編注本』周星衢基金、2019年
威北華	流星	流星	小説	シンガポール	南洋商報社	1955年3月	14作品	『威北華文芸創作集』有人出版、2016年
威北華	春耕	春耕	随筆	シンガポール	友聯圖書公司	1955年9月	28作品	『威北華文芸創作集』有人出版、2016年
楼文牧編・訳	Pantun: 馬來民族的詩	パントウン: マレー民族の詩	詩	シンガポール	世界書局	1957年	100作品	
魯白野	馬來亞	マラヤ	地誌	シンガポール	世界書局	1958年		
威北華	黎明前的行脚	夜明け前の行脚	小説、詩、随筆	シンガポール	世界書局	1959年12月	39作品	『威北華文芸創作集』有人出版、2016年
魯白野	印度印象	インドの印象	随筆	シンガポール	世界書局	1959年	29作品	
魯白野	实用馬華英大辞典	实用マレー語・華語・英語大辞典	辞書	シンガポール	世界書局	1959年		
楼文牧編	愛詩集	愛詩集	詩	シンガポール	世界書局	1960年	37作品(ルー著作は6作品)	『婚後悲歌』のみ『威北華文芸創作集』有人出版、2016年

[張 2016: i-iv; xiv-xv; 周星衢基金 2019: 29; Ng 2023: 25] をもとに作成。

用馬華英大辞典』の再版への序文で、長女の誕生を受けてシンガポールに拠点を定めることを決意したと記している。流浪の日々を終え、シンガポールに腰を落ち着けて、これから先の長い執筆活動を建設的な視点から行っていくことを決意したと、1961年春の日付で記している[魯 1970]⁹⁾。

シンガポールでルーは、『益世報』¹⁰⁾と『マラヤ・トリビューン (*The Malaya Tribune*)』¹¹⁾で法廷記者として働いた。1950年からは、『星洲日報』で国際面の電訳翻訳を務めた。『星洲日報』ではのちに、マレー語と華語の2言語による特集欄「国語周刊」を担当した。ルーは1961年4月に38歳の若さで死去するまで『星洲日報』に勤務した[周星衢基金 2019: 28]。

9) 筆者の手元にあるのは、1970年10月版である。

10) 1915年に天津でカトリックの宣教師Frédéric-Vincent Lebbeが創刊した『益世報』が1949年に中国共産党によって停刊となり、1952年5月にシンガポールに移って創刊。しかし資金難により同年9月に停刊した。

11) アジア人向けの英語新聞として、セイロン生まれのユーラシアンであるジョージ・エドワード・ボガーズ(George Edward Bogaars)が1914年1月に創刊。取締役会は、華人、インド人、ユーラシアン、ユダヤ人で構成され、著名な人物としてリム・ブンケン(Lim Boon Keng/林文慶)、タン・チェンロック(Tan Cheng Lock/陳積禄)、ロク・ワントー(Loke Wan Tho/陸運涛)などが名を連ねている[Lee 2021]。1935年にクアラルンプールに支社を置き、同地で編集・印刷できる体制を作り、同年3月より連合マレー諸州版を刊行した。シンガポール版と連合マレー諸州版を持ったことで、「マラヤの最初の全国紙(Malaya's first national newspaper)」として名乗りを上げた[Malaya Tribune 1935.1.18]。『マラヤ・トリビューン』は1914年にマレー語版『ルンバガ・ムラユ(Lembaga Melayu)』とタミル語版『マラヤ・ヴァラカム(Malaya Valakam)』を刊行した。『ルンバガ・ムラユ』は1931年まで刊行され、初代編集長をモハメド・ユーノス(Mohamed Eunus bin Abdullah)が務めた。

ルーは1948年から華語による文芸活動を展開した。複数のペンネームをもち、主に3つのペンネームをジャンルによって使い分けていた。地誌を題材とする随筆や論説を執筆する時はルー・ボーイエを、小説を執筆する時はウェイ・ペホア(Wei Pe Hua/威北華)を、詩を創作する時はロウ・ウエンム(Lou Wen Mu/楼文牧)をそれぞれ名乗った¹²⁾。ヤオ・ズ(姚紫/Yao Zi)¹³⁾が編集を務めた『南洋商報』文芸特集欄の「世紀路」や「文芸行列」、『南方晩報』の「緑洲」、ファン・シウ(方修/Fang Xiu)¹⁴⁾が編集を務めた『生活文叢』、星洲日報が1951年4月に創刊した『星洲週刊』などに寄稿した[周星衢基金 2019: 28]。1948年以降にルーが執筆した作品は、1950年代から1960年代にかけて書籍にまとめられて刊行された(表1)。

ルーは、マラヤの華人のマレー語学習を積極的に推

12) ペンネームはほかにも、越子耕(Yue Zi Geng)、華西定(Hua Xi Ding)、破冰(Po Bing)、范畴(Fan Chou)、姚遠(Yao Yuan)、郁強(Yu Qiang)などを使っていた。

13) 本名は鄭夢周。1920年生に福建省泉州生まれ。1947年にシンガポールに移り、1948年に小学校の教員となる。1949年3月に姚紫の名で『南洋商報』に中編小説「秀子姑娘」を発表し、同作品により文壇で知られるようになった。5月に同作品を単行本として出版し、教員を辞め、『南洋商報』に入り、資料室主任と編集を兼務した。『南洋商報』では特集欄の編集を務め、「文芸行列」と「世紀路」のほか「家庭と婦女(家庭与婦女)」、「土曜日(星期六)」も担当した。同じ頃に『南方晩報』の特集欄「緑洲」の編集も務めていた[馬華文学電子図書館 2024]。

14) 本名は呉之光。1922年に中国で生まれ、1938年にシンガポールに移ってきた。『星洲日報』で編集を務め、マラヤの新聞や雑誌などに掲載された華語文学を丹念に集めてマラヤの華語文学の系譜を整理した。10巻で構成される『馬華新文学大系』を始めとし、マラヤの華語文学の系譜について論じた著作を数多く出版している。

進した¹⁵⁾。1959年に世界書局からマレー語・華語・英語の辞書『实用馬華英大辞典』(实用馬華英大辞典)¹⁶⁾を出版した。1960年に開始した『星洲日報』の特集欄「国語周刊」の編集を担当した。1961年に刊行された華語とマレー語の2言語による月刊誌『マレー語月刊 (Majalah Bahasa Melayu/馬來語月刊)』の編集を担当した。

2. 『マラヤ』のマラヤが指し示すもの

序文と各章の内容

『マラヤ』の内表紙には、マラヤ連邦の国章にある文言「団結は力なり (Bersekutu bertambah mutu/ 団結是力量)」が記されている。またこの文言の下に、ラーマン首相がマラヤ連邦独立1周年を記念して1958年8月31日に行ったスピーチから、「我が国は動乱する世界の中で安寧を誇る国家である」という一文をマレー語で引用して記載している。

内表紙に続き序文が記されている。序文は「私はマラヤを愛している」という一文で始まり、その理由が明かされる。ルーがマラヤを愛するのは、自身がマラヤに生まれ、ペラ川の滋養に富んだ水を飲み、錫鉱山の赤い泥と戯れながらマラヤで育まれたためだと記す。しかしマラヤを愛する理由はそれだけではなく、マラヤがアジアの歴史の力強い足取りと歩調を合わせ、勇敢に前進しているためであるとも記している。

前進するマラヤのイメージは、経済開発の視点から描かれる。マラヤの山河に無数の工場や錫鉱山が筍のように芽吹き、水利を発展させて河川の水を水田にみなぎらせ、水力を電力に変換して生産に活用する。祝福されたマラヤの地に平和な国家が建設され、マラヤを愛する1人1人がみな国家建設に貢献する意志と情熱を持ち、心をつにして最も美しい方向に向かっていると信じているとし、マラヤの前途に大きな期待を寄せる。

こうした序文が象徴するように、『マラヤ』には、マラヤがたどってきた歴史と、それを踏まえたこれからの開発戦略が書かれている。本文は213ページで10章から成る。各章のタイトルは以下のとおりで、第

1章から第3章と、第9章は主に歴史について書かれており、第4章から第8章と第10章は主に開発戦略について書かれている。

第1章 マラヤの発展

1 前史のマラヤ / 2 中国古代文化の痕跡 / 3 半島における文明の夜明け / 4 マラッカ王朝 / 5 イギリス勢力の台頭 / 6 独立建国の前夜

第2章 マラヤの地理

1 古代のマラヤの地理 / 2 今日のマラヤの自然地形 / 3 マラヤの経済地理

第3章 躍進中の人口

1 緒論 / 2 マレー人 / 3 華人 / 4 インド人 / 5 結論

第4章 経済制度の構造

1 土地法 / 2 土地利用 / 3 我が国の農業 / 4 米稲 / 5 パイナップル / 6 椰子 / 7 ヤシ油 / 8 カカオ、茶、コーヒー / 9 その他の農作物 / 10 錫産業 / 11 漁業 / 12 畜産 / 13 貿易

第5章 ゴムと錫

第6章 労働運動

第7章 ムルデカの門をたたく

第8章 建国のエンジニア

第9章 マレー民族の本質

第10章 古い問題、新たな方法

マラヤが意味する領域

『マラヤ』は、民族、文化、経済、政治、社会が複雑かつ多様で、政府の行政経験は乏しく、民主主義が機能しないのではないかと懸念を持たれていたマラヤ連邦が、平穩に独立1周年を迎え、華人、インド人、マレー人が誠実に協力して平和国家の建設という偉業を完遂したことを祝って書かれたものである[魯 1959: 196-197]。『マラヤ』は、マラヤ連邦について書かれたものであることがわかる。

他方で『マラヤ』は、マラヤ連邦のみについて書かれたものではない。『マラヤ』には所々でシンガポールについての記述があったり、マラヤ連邦とシンガポールが将来的に1つの国家になることへの希望が記されたりしている。

第3章「躍進中の人口」では、マラヤ連邦とシンガポールを合わせた人口が1957年に750万人以上に達しているとし、1911年の人口250万人と比較すると「我が国の人口」は45年間で3倍に増加するほど人口増加が著しいと述べる[魯 1959: 32]。第10章で

15) 1950年代から60年代にかけて、シンガポールの華人社会でマレー語学習ブームが起こり、華語文芸世界の中で育ちながらマレー語を習得した華人知識人がこれを支えた。これについては[篠崎 2020]を参照。

16) マレー語のタイトルは、*Kamus Berguna Bahasa Melayu-Tionghua-Inggeris*、英語のタイトルは、*A Practical Malay-Chinese-English Dictionary*である。

は、「何者かが間違った行動をとったため、元々は1つの家族だったシンガポールとマラヤは2つの政治単位に分割されてしまった」と述べる[魯 1959:209]。ラーマンはマラヤ連邦とシンガポールの合併にあまり前向きではないが、シンガポールとマラヤ連邦が将来的に1つの国家に統合・統一されればそれは双方にとって利益となるとし、シンガポールやマラヤ連邦の政治家の中にもシンガポールとマラヤ連邦の統合を支持する者が少なくない[魯 1959: 211]として、ルーは、マラヤ連邦とシンガポールの統合に期待をかける。それとともに、シンガポールとの統合を念頭においたマラヤの将来的な開発戦略を提言している。

以上のことから『マラヤ』は、マラヤ連邦にシンガポールも加えて新たに発足するであろう来るべき国家についての構想という側面も持つ。

『マレー雑記』から『マラヤ』へ

ルーは『マラヤ』で、マラヤの繁栄を築いたのは華人、マレー人、インド人の3大民族(中馬印三大民族)であり[魯 1959: 30]、3大民族が心をひとつにして戦った結果、マラヤ連邦は平和な国家として成立したとする。この歴史的な偉業を大切にするため、民族の調和を図り、よりよい暮らしとともに創造していかなければならないとする。そのためには、マレー語に「知らなければ、愛せない(tak kenal, maka tak cinta)」という慣用句があるように、マレー系同胞の性質と彼らの生き方を理解しなければならないとする[魯 1959: 180]。また、華人とマレー人の文化交流は、当然ながら自分たち文化人にとって目下最も重要な仕事のひとつであると述べる[魯 1959: 193]。

そのため『マラヤ』は、マレー人の歴史や社会、文化、文芸について多くのページを割いている。また、中国とマラヤは古代から交流し、マラッカ王国の時代を経てマラヤ連邦に至るまでマラヤの発展に華人が貢献してきたことを繰り返し書いている。

このような関心は、『マラヤ』の前にルーが刊行した『マレー雑記』という書籍にも見られる。

『マレー雑記』は、タイトル一覧(表2)が示すとおり、マラヤの歴史や地理、文化についてのエッセイを収録している。その序文にルーは、華人が古くからマラヤの開拓に貢献してきたことを記している。それによると、華人によるマラヤ開拓の歴史は、(1)古代から明にかけて華人が平和的な貿易活動に従事した時代、(2)明の勅使鄭和がマラッカの建国を支援した時代、(3)19

世紀以降、華人労働者が農業・鉱業の開発に従事した時代の3つの段階に大きく分けられるとする。ルーは、この3つの段階を通じて華人とマレー人という2つの主要民族は緊密で平和的な友好関係を維持してきたとし、今後もその関係を発展させることができると信じていると述べる[魯 2019c: 25]。

『マレー雑記』は、マラヤの地誌を題材にしているため、本来なら『マラヤ雑記』というタイトルになりそうである。しかしそうはなっておらず、『マレー雑記』となっている。

『マレー雑記』では、マラヤの歴史の一部としての華人というテーマと並んで、華人がマレー人とどのように関係を構築していくのかというテーマが大きな関心ごととなっている。マレー人との関係構築のためには、マレー人のことを知らねばならないという思いから、マレー人の歴史や文化、社会、文学についての論考が多くなっている。そのような思いが『マレー雑記』というタイトルの由来となっていると考えられる。

これに対して『マラヤ』は、華人とマレー人との協力・共存というテーマに加えて、マラヤ連邦およびマラヤ連邦とシンガポールの合併を通じて新たに創出されるであろう新国家の開発戦略も重要なテーマとなっている。『マラヤ』では国家の将来が明確に意識され、国家の開発を促進するための戦略が具体的に論じられており、そのため『マラヤ』はマラヤという書名となったのだと考えられる。

3. マレー世界の広がり、インドネシアとのつながり

参照点としてのウィンステッド著『マラヤとその歴史』

ルーが『マラヤ』を通じて論じているのは、中国を起源とし、マラヤ、ジャワ、スマトラ、ボルネオ、ミンダナオに及んだマレー系の人々の移動の歴史であり、また、ジャワ、スマトラ、スラウェシなどからマラヤへのマレー系の人々の人口流入の歴史である。

このことを論じるうえでルーが依拠しているのは、マラヤで植民地官僚として教育行政に携わり、研究書を多数著作したことで知られるリチャード・ウィンステッド(Richard Winstedt)の『マラヤとその歴史(Malaya and Its History)』¹⁷⁾である。

17) 1948年が初版で、その後、第2版(1951年)、第3版(1953年)、第4版(1956年)、第5版(1958年)、第6版(1961年)、第7版(1966年)と版を重ねている。ルーが参照できたのは第5版以前と思われるが、どの版を参照したのかは言及されていない。本稿では1966年版を参照した。

表2 マレー雑記タイトル

華語タイトル	日本語訳	最初の頁	最後の頁
中国与马来亚的古代交通	中国とマラヤの間の古代の交通手段	1	7
郑和与马六甲	鄭和とマラッカ	8	11
古城两题	古都の2つの話題	12	14
马六甲英华学院	マラッカのアングロ・チャイニーズ・カレッジ	15	21
旧柔佛之历史价值	旧ジョホール州の歴史的価値	22	29
柔佛州的开发	ジョホール州の開発	30	32
潮侨开发的柔佛	潮州人が開発したジョホール	33	35
柔佛州的港主制度	ジョホール州の港主制度	36	38
吉隆坡开基人叶亚来	クアラルンプールの開祖ヤップ・アローイ (Yap Ah Loy)	39	49
拿律之役	ラルットの戦い	50	53
峇峇的文学	ババの文学	54	58
甲必丹制度的盛衰	カピタン制度の盛衰	59	68
马来亚胶业史的发展	マラヤのゴム産業の発展	69	76
马来亚的锡	マラヤの錫	77	79
米的生产	米の生産	80	82
船的故事	船の物語	83	86
陆上的交通	陸上交通	87	89
胡椒和甘密	胡椒とガンビール	90	92
香料的贸易	香辛料貿易	93	95
劳动的象	労働するゾウ	96	99
蛇年谈蛇	蛇年に蛇について語る	100	102
南方的牛	南方の牛	103	108
锡之国——霹靂	錫の王国——ペラ	109	115
柔佛剪影	ジョホール州の切り絵	116	123
从彭亨到吉兰丹	パハン州からクランタン州まで	124	129
古城札记	古代都市に関するメモ	130	132
檳榔的岛	ピンロウの島	続集	133
在吉打州独歩	クダ州一人歩き	続集	136
丁加奴——河流的国度	トレンガヌ——川が流れる国	続集	139
马来民族的拓殖	マレー民族による開拓	続集	144
谈马来亚的历史	マラヤの歴史について語る	続集	152
马来纪年	スジャラ・ムラユ	続集	155
阿历山大帝之谜	アレクサンダー大王の謎	続集	159
民族英雄汉都亚	国民的英雄ハン・トゥア	続集	162
莱佛士的文书鸭都拉	ラッフルズの秘書アブドゥッラー	続集	166
纪念莱佛士	ラッフルズを偲んで	続集	170
创建檳城的莱德船长	ベナンを建国したライト船長	続集	173
拿督翁叛逆起家	ダト・オンは反乱者としてキャリアアップした	続集	177
印度人的拓殖	インド人による開拓	続集	181
印度文化的影响	インド文化の影響	続集	184
马来文艺	マレー文芸	続集	187
谈马华字典的编辑	マレー語・華語辞書の編集について語る	続集	191
马来古法	マレーの古代の法律	続集	195
森州的母系社会	ヌグリスンビラン州の母系社会	続集	198
土地法的变迁	土地法の変遷	続集	201
回教东侵	イスラム教の東方への拡大	続集	204
回教今昔	イスラム教の過去と現在	続集	208
马来人的战争观	マレー人の戦争観	続集	217
古城的陷落	古都の崩壊	続集	220
马来剑	クリス	続集	224
马来剑的神话	クリスの神話	続集	228
北海浮炮	バタワースの大砲	続集	231
马来古炮	マレーの古い大砲	続集	234
芙蓉的神话	スレンバンの神話	続集	237
石船山	石船山(スレンバンのブキジュン／蜈蚣山の伝説)	続集	240
影子戏	影絵劇	続集	243

ウィンテッドは同書の2章で、マラヤに居住する人々の移動の歴史を論じる。そこでは、最も早期にマラヤに居住したアポリジニたる原始マレー人 (primitive Malay)、紀元前2500年から紀元前1500年の間に雲南から陸路や海路でマラヤを経由してジャワやスマトラに移動した文明化されたマレー人 (civilised Malay)、古代国家およびマラッカ王国の時代に関係性が確認され、植民地期に人口が急増した華人、インド文明やイスラム教のマラヤへの伝播およびインド洋交易の担い手で植民地期に労働者として人口が急増したインド人が主な民族集団としてとらえられ、いずれも移動を経てマラヤに居住するに至ったことが論じられている。

ウィンテッドは、文明化されたマレー人がマラヤのマレー人のルーツであるとし、マラヤのマレー人社会は現代に至るまで周辺地域から人口の流入を受けながら発展してきたとして以下のように記述する。文明化されたマレー人は、ヒンドゥー教を受容し、クダ、クランタン、パタニにランカスカやシュリヴィジャヤなどを建国した。しかし、広域に散らばって居住し、統一的な名前を持たなかった。マレー人を自称し始めたのは、13世紀に興ったジャンビまたはムラユの人たちであった。ジャンビが陥落すると、ミナンカバウ人がスマトラを支配した。マラヤ半島でマラッカ王国が興り、商業的に隆盛すると、対岸のスマトラから多くのマレー人、特にミナンカバウ人を惹きつけた。ミナンカバウ人の移住は、パハンやスグリズンビランにも及んだ。また、スラウェシのブギス人が1700年にスランゴールを設立し、1722年にはジョホール王国の副王となった。ブギス人はマラヤの王族と結婚し、地元のマレー系臣民を支配した [Winsted 1966: 14-16]。1947年の国勢調査では、マラヤ連合のマレー人239万8,186人のうち27万5,700人がスマトラとジャワからの比較的新しい移民であった [Winsted 1966: 18]。

ウィンテッドは他方で、マレー人の原住民性を強調する。文明化されたマレー人が先史時代にマラヤ半島にいたことを示す考古学的な証拠がわずかではあるが存在し、マラヤ半島各地にマレー語に由来する地名が古くからあるとして、マレー人のほとんどが中世にスマトラから渡ってきたと推測するのは妥当ではなく、イギリス人がイギリスの原住民と呼ばれるのと同様に、マレー人はマラヤの原住民とみなされる権利があると述べる [Winsted 1966: 16]。

ルーは以上のウィンテッドの議論に主に依拠し、以下のように記述する。雲南からマラヤに、またマラヤを経てスマトラやジャワ、ボルネオにマレー人が移住し、パレンバンを拠点としたシュリヴィジャヤやジャンビのムラユ、ジャワ島から興ったシャイレンドラやマジヤパヒトなどを設立し、マラヤはその勢力下に置かれた。マラヤ側でもマラッカ海峡両岸に影響力を及ぼしたマラッカが隆盛すると、その富に引き付けられてミナンカバウ人がマラッカに、さらにスグリズンビランやパハンに移住した。これ以降、スマトラからマラヤへの移住の波が生じた。ペラ、クダ、プルリスでは、アチェ人やブギス人が支配したり、影響力を及ぼしたりした。18世紀初めにはジョホールでブギス人が副王となり、スランゴールを侵攻して同地に統治を確立した [魯 1959: 5; 10; 45; 183-185]。1930年代以降、ジャワ人の移住が増加し、ジョホール、シンガポール、スランゴールで特に増加した。1947年の統計によるとマラヤ国外で生まれたマレー人の人口は11万5,000人で、マレー人全体の13%を占める。出身地の割合は、ジャワ62%、スマトラ17%、ボルネオ9.5%、スラウェシ2.2%である。スランゴールおよびペラ以南でジャワ出身者が多く、以北でスマトラ出身者が多い。スマトラからやってきた人たちは比較的容易にマラヤのマレー人社会に同化されていくのに対し、ジャワ人は自身の村落を建て、マレー人と別々に住むことを好む。こうした歴史を踏まえてルーは、マレー人社会の成立においてインドネシアからマラヤへの移民は最も重要な要素であったと述べる [魯 1959: 45-46]。

インドネシアからマラヤへの人口流入を強調したルーの意図

マラヤのマレー人社会の大部分がインドネシアから流入したマレー系の人々によって構成されているとルーが強調する意図は2つあるように思われる。

1つは、ルーはマレー人をマラヤの原住民として位置づけている¹⁸⁾ものの、マラヤのマレー人の外来性を示すことで、華人の外来性を相対化しようとい

18) ルーは、1954年の人口統計に基づく民族の割合はマラヤ連邦とシンガポールを合わせるとマレー人43%、華人43.9%、インド人11.1%であるとする。マラヤ連邦のみでも、マレー人49%、華人37.6%、インド人11.7%であり、マラヤは東南アジアで唯一、外来民族が原住民よりも多い国家で、文化的に全く異なる民族が調和の中に暮らす平和な国家であると述べる [魯 1959: 32]。ルーは、華人とインド人を外来民族ととらえ、マレー人を原住民ととらえているようである。

う意図である。

もう1つは、インドネシア・ナショナリズムの精神を継承したいという思いである。ここでいうインドネシア・ナショナリズムの精神とは、インドネシアの独立運動を支えたインドネシアの文芸作品を貫く思想である。

ルーにとってインドネシアは、マラヤに先駆けて独立を達成したあこがれの地であった。また、インドネシアの独立運動を支えた精神的支柱として文芸活動の役割が大きかったと見ており、インドネシアがそのような文芸活動を発展させたことを高く評価していた。ルーのこのような評価は、ハイリル・アンワル (Chairil Anwar) への敬愛に基づいていた。

ハイリル・アンワルは、インドネシアで「1945年世代」の先駆者として位置づけられる詩人である。ルーは1948年にジャカルタに滞在していた時、青年文芸サークルに参加し、そこでハイリル・アンワルと出会い、交友を深めた。このことをルーは『春耕』に収められた「夜会」という短編小説に記している [威 2016b]。ルーはハイリル・アンワルと一緒にいると率直で正直になり、遠慮なく互いを批評しているうちに激しく衝突することもしばしばであったが、ハイリル・アンワルを敬愛し慕っていた。

ルーは1959年に刊行した『実用馬華英大辞典』の序文に、辞書の編纂を勧めてくれて、最初のきっかけを作ってくれたのが親友ハイリル・アンワルであったと記している。辞書を刊行することができ、十数年来の夢が叶った今、親友はジャワ島の荒原で眠っていると思いを馳せる [魯 1970]。

ルーは、ジョグジャカルタでも、ジャカルタでも、メダンでも、シンガポールでも、文芸青年たちの集いではハイリル・アンワルの不朽の名作「おれ (Aku)」が必ず朗読され、インドネシアとマラヤで刊行される文芸書や教科書のほとんどが「おれ」を掲載するほど、マレー語・インドネシア語文芸界でハイリル・アンワルが熱狂的な人気を得ていると記述する。ハイリル・アンワルがこれほどまでに支持されている理由として、ルーは、ハイリル・アンワルが民族革命闘士であるからだとし、以下のように主張する。ハイリル・アンワルは日本軍政期のメダンで反帝国主義を題材とした詩集を次々と刊行し、地下に流通させた。オランダとの独立戦争の際にはジャワ島の戦場を回り、自身の詩を朗読した。その詩は力強さと生命力に満ち、時代の痛みを反映し、決意と希望が憂いと失望

と混在している人々の気持ちを歌い上げた。詩を有力な武器にして、敵を猛烈に打ち破り、腐敗した役人の仮面を打ち砕き、人民に生きる意志を鼓舞した。ハイリル・アンワルは想像力が豊かで、字句を柔軟に操り、インドネシア語を古い文法の束縛から解放し、新たな革命的なスタイルをもつ作風を打ち立て、インドネシア語文学とマレー語文学を復活させた。インドネシアとマラヤの新時代の作家たちは、闘争精神と英雄の気概に満ちたアンワルの詩に啓示を得て、その斬新なスタイルや表現技巧をまねるべく先を争っている [魯 1960: 19-20]。

ジャカルタの青年文芸サークルも、ルーにとって居心地のよい場所だったようである。青年文芸サークルでは夜会がしばしば行われ、歌ったり、踊ったり、即興で詩を作ったり、詩を朗読したりといった活動が行われた。ルーは、そこではどのような背景を持つ人であっても分け隔てなく同志として受け入れられる様子を描いている。活動を共にしている時は、一見、個人の色も独特の性格も私欲もないように見えるが、よく見るとみな独自の表現をもち、それぞれがもつ歴史は多様だとルーは書いている。作家、詩人、歌人、学者のみならず兵士もいて、彼らは、広野を開墾し、輝かしい文化都市を作るという共通の目的をもっていった。ルーは、この青年文芸サークルは文化砂漠の中のオアシスのようで、流浪に疲れた者が休息し、闘志を蓄え、新しい喜びを迎えるところであったと記す。

ルーは、インドネシア語は歴史のハイウェイを疾走してきた兄貴分であるとし、それに対してマラヤのマレー語は過去100年間、足踏みをしてきたと述べる。しかしマレー語・マレー文学会議 (Kongres Bahasa dan Persuratan Melayu) が開催されるようになり、「言語は民族の命 (bahasa jiwa bangsa)」というスローガンのもと、マレー語の改善と発展に努めマレー人の言語と文芸を豊かにすることが決議され、マレー語のローマ字表記のルールが採択されたこと、さらに、言語出版局 (Dewan Bahasa dan Pustaka) を通じてマレー語とインドネシア語の統一を図り、科学技術に関する専門用語を開発することが決議されたことを、ルーは歓迎する [魯 1959: 193]。

マレー語はマレー人の言語という側面を持つ一方で、インドネシアも含めたマレー世界の共通語という側面も持つ。ルーはマレー語に後者の側面をより見出していた。ルーは、マレー世界に生きる人たちが出自や民族を問わずマレー語を習得し、マレー語を

共通語として思想や哲学や価値観を語り合う関係性を深化させることで、マレー世界の平和を実現し維持したいと願っていた。

しかしルーにとってインドネシアは、平和的な国家とは言い難かった。インドネシアでは独立戦争期に植民地の秩序や制度を否定する社会革命が進展し、華人はオランダ協力者とみなされ、生命や財産を奪われる過酷な経験を強いられた者も多かった〔真好 2016: 137-140〕。

ルーは『黎明前の行脚』に収録された短編小説「戦争捕虜」で、オランダとの英雄的な戦いに挑んだインドネシアの人々に大きな共感と支援を寄せていると述べる一方で、インドネシアの民兵による華人の大規模な虐殺に苦悶していると書いている〔威 2016c: 350〕。また、オランダ側の兵士であったインドネシア人がインドネシア独立軍にとらえられ捕虜となり、頭を丸刈りにされ、オランダの国旗を巻き付けられて、大勢に取り囲まれて中央で踊らされ、嘲笑され、取り囲まれた輪から逃れようとしても蹴り返されてまた踊らされ、その拳句に銃殺されたエピソードを書いている。ルーは、このような行いは野蛮すぎると憤り、独立軍の兵士である古い知り合いに、「これから先、人間同士の殺し合いを見るのがないよう望む。さきほどの嘲笑は血と涙に満ちていた。インドネシア人がインドネシア人を殺す悲劇は、いつになったら終わるのか」と訴えたと書いている〔威 2016c: 352〕。

ルーは、形式にとらわれず字句を操り、時代の痛みを反映し、読む者に力強さや生命力を与え、生きる意志を鼓舞するような文芸作品を作り出したハイリル・アンワルの精神と、出自や民族を問わず誰でも歓迎し、インドネシア語で思想や哲学を語り合うジャカルタの青年文芸サークルのような空間の創出を、新たに秩序が構築されゆくマラヤを通じて実現することに希望を見出し、その社会が平和なものでなければならぬと強く思っていた。ルーは、インドネシア語文学の遺産はマラヤにとって外部のものではなく、マラヤにとっても遺産であり、その遺産をマラヤでも継承・発展させることが可能な土壌が十分に備わっていることを、歴史的に証明しようとしたのであろう。

華語を通じて

マレー語・インドネシア語文芸を継承する

ルーはスマトラ島およびジャワ島に滞在していた時にインドネシア語に通じていったものと思われる

が、幼少期より家庭でマレー語に触れていたようでもある。ルーは、父方の祖母はニョニヤであり〔魯 2019b: 279〕、自身はババ(峇峇, Babaの音訳)であると明かしている〔魯 2019a: 132〕。

ルーは、ババという語は祖父、男性への敬称、子供などを意味するトルコの言葉で、インドを經由して南洋に広まり、現地生まれの華人の呼び名となったと説明する¹⁹⁾。ルーによればババの特徴は、人をもてなすのがうまく、楽天的で寛大で、享楽や遊びを愛することである。イギリス国籍を持ち、中国の言語がわからない人もいるが、いまでも線香を焚いて神を祀り、子供に中国名をつけ、中国式の衣服(唐装衫褲)を着ている人もいるなど、中国の伝統や習慣を最も強固に保持してきた人たちだと評する〔魯 2019a: 132-133〕。

19世紀から20世紀にかけて、中国の古典文学がマレー語に翻訳されて、多数出版された。このことについてルーは、ババたちによって中国の古典文学が多数マレー語に翻訳しており、書かれている言語はマレー語であるがそこに表現されているのは中華の思想であり、中国の文化や伝統の維持に尽力してきたとする。これらの努力はすべて自発的で自覚的なもので、中国生まれの華僑が画策したものではないとし、ババは祖国の遺産を愛さないと罵ってきた人々は、こうした歴史的事実を踏まえて、ババに対する認識を改めるべきだと訴える。またマレー語に翻訳された中国古典文学は、マレー語を解する人たちに中華文化を伝える役割も果たしていることから、ババは中国とインドネシアおよびマラヤの文化交流を促進したとする〔魯 2019d: 333-335〕。ルーが自身をババであると称する時、そこには、自身が中華文化の継承者であるとの自負が込められている。

他方でルーは、多数のマレー語・インドネシア語の文芸作品を華語に訳した。マレー語を通じて中華文化の継承が可能だとするルーの主張に基づけば、華語を通じたマレー・インドネシア文化の継承も可能だということになる。

19) タン・チャーベンは、欧米人による辞書〔Dennys 1894; Clifford and Swettenham 1895; Swettenham 1896; Wilkinson 1901〕や書籍〔Vaughan 1897〕に基づき、19世紀末から20世紀初めまでにババという語には、マラッカ海峡地域で生まれた外国人(華人、ヨーロッパ人、ユーラシアン)の子供を指す場合と、マラッカ海峡地域で生まれた華人、とりわけ華人とマレー人の混血者を指す場合があったと整理する。語源については、トルコ語やペルシア語、アラビア語、ベンガル語、ヒンディー語、ウルドゥー語などでbabaが父、祖父、老男、男性の敬称を意味するとし、ババの語源は中東にあり、それがインド経由で東南アジアにもたらされたとする〔Tan 1988: 10-13〕。タンが参照した文献をルーも参照したものと思われる。

ババの先達者たちは、マレー語を介する人たちに中華文化を紹介するというベクトルの一方を担った。これに対し、自身もババであるルーは、華語を介する人たちにマレー・インドネシア文化を紹介するというもう一方のベクトルを担った。そうすることでルーは、双方向にベクトルを築こうとした。

4. マラヤの開発戦略 —— 華人を支えるマラヤの経済開発

錫・ゴムへの依存からの脱却と 産業の多角化という課題

ルーは、マラヤは政治的独立を果たしたが、経済的独立も追求しなければならないと主張する[魯 1959: 213]。マラヤは政治的な勝利を取めたが、経済的な戦いを勝ち抜くための新たな兆候が見られないとする。例えば、マラヤの錫産業への投資の60%は外資によるものであり、自国の資本家を育成し支援しなければならないとする[魯 1959: 198]。

ルーはマラヤの経済に楽観的な側面と、楽観できない側面を見出す。楽観的な側面として、マラヤにおける賃金水準や1人あたり国民総所得の高さを挙げる。それによると、マラヤの1人あたりの国民総所得は800海峽ドル(1953年)であり、アメリカの9分の1、イギリスの6分の1に過ぎないが、日本とほとんど変わらず、アジアで最高水準である[魯 1959: 64]。また、マラヤの賃金はアジアの中でもかなり高く、シンガポールの繊維産業の平均賃金は香港より75%高く、日本より55%高く、インドより200%高い。他方でルーは、産業が発展しているかどうかは必ずしも賃金の水準が決め手になるわけではないとし、シンガポールの労働者と比べて日本の労働者の生産能力は3倍であり、香港の労働者の生産能力は50%高いと述べ[魯 1959: 202]、マラヤの労働者の生産能力を挙げる必要性を指摘する。

ルーは、マラヤの経済は主にゴム産業、錫産業、輸出業、農業の4つ分野で構成されるとする。このうち最初の3分野がマラヤの経済をけん引し、とりわけ錫とゴムは国内総生産の20%を占める。これら3分野の主な担い手はヨーロッパ人、華人、インド人で、華人とインド人はマラヤ国民となったのでマラヤの民族資本であるとする。これに対して農業はマレー人を主な担い手とし、家族で消費する米や野菜、果物の栽培にとどまり、商業的な側面がほとんどないとする[魯 1959: 64]。

ルーは、マラヤの経済は錫とゴムに完全に依存しているが、今後10年以内に産業を多角化させ、とりわけ工業化を進展させて、増加する労働者を吸収できる経済構造に変えていく必要があると指摘する[魯 1959: 200]。ルーがそのように主張するのは、マラヤにおける急激な人口増加を懸念してのことであった。ルーは、1959年時点でマラヤの人口は600万人に達し、年間に自然増で人口が3%増えており、このままだと年20万人増加する計算となり、遠くない将来、マラヤの労働者市場に毎年20万人の増加が生じることとなると指摘する。増加した労働力の受け皿となる産業がなければ、失業者の増加を招くこととなると憂慮する[魯 1959: 203]。

ルーは、マラヤの工業化には様々な懸念があるとする。マラヤは工業後進国であり、近代産業に必要な石炭、鉄、石油などの資源や工業原料が乏しく、資本も技術も不足しているため、外資の導入を促進することが必須だとする。その一方でルーは、マラヤ政府はマラヤの民族資本の発展を奨励し、支援することにも特別な注意を払わなければならないとする。独立後のマラヤで華人資本はもはや外国資本ではなく、マラヤの民族資本の主要部分を占めており[魯 1959: 202-204]、華人実業家はヨーロッパの企業と競争できる民族資本と国際貿易のネットワークを進展させおり、マラヤが軽工業の開発を促進するうえで、その輝かしい歴史的使命を遂行するために最大の負担を負うのは必然的に華人であると述べる[魯 1959: 65]。

ルーが人口増加を懸念するのは、日本占領期が終結した後に急激な人口増加を経験したシンガポールにルーが身を置いたこととも関係があるだろう。増加した人口が安定的に雇用を確保できるようにマラヤは産業を多角化し、とりわけ工業化を進展させなければならないと、そのためにマラヤの民族資本となった華人が主導的な役割を担っていくべきだとルーは考えていた。それはまた、マラヤの建設を支える中心的な存在となることで華人がマラヤに確固たる居場所を確保していけるのだという思いでもあった。

マレー農村開発の必要性

ルーは、4つの分野のうち残る農業についても、マレー人農村の開発を進めたいかねばならないと主張する。ルーにとってマレー人農村の開発は、マラヤ全体の経済の底上げのために不可欠であり、自分事と

しての問題であった。また、マレー人農村を支援するために華人ができることは多いとルーは見ていた。

マレー人農村の開発についてルーは、1950年に設立された農村工業開発局 (Rural and Industry Development Authority, RIDA) のもとで道路、橋、埠頭、水利、用水路、灌漑などのインフラの建設、農村部の若者に対する職業訓練、農業や漁業の機械化の促進、起業や商業活動のための融資などを通じて、農村の経済や福祉が向上したものの、開発のペースは遅く、農民は保守的で、RIDAが提供する支援をなかなか受け入れないとする。また、RIDAによる融資は、カンボンの比較的裕福な人々や、マレー人の商業機関や小規模商店、請負建築業者に提供されており、地主や資本家の育成に効果はあるが、マレー人の経済問題の本質、すなわち農村の貧困と村落社会の崩壊を解決することはできないと述べる [魯 1959: 205-206]。

ルーはマレー人の農村の貧困と村落社会の崩壊について、次のように記述する。大土地所有者と貧農の格差が拡大している。社会環境の変化、新しい娯楽、日常生活や婚姻、離婚、隣人関係における新しい態度が、保守的なマレー人の農村を解体している。政治面では、伝統的な村長がいる一方で、民選制となった地方議会に対応している宗教指導者や長老がいて、新しい青年の典型であるマレー人教師からの挑戦もある。非常事態宣言により、農村のマレー人青年が治安部隊や軍にリクルートされた。20代、30代のマレー人青年の半数以上は軍隊や治安勢力に従事した経験を持ち、規律的な生活を経験し、都市の生活文明に接しており、農村には戻らない。また彼らは半島部のいたるところを家とし、赴任先の地域でマレー人少女と結婚し、その後気の向くまま離婚し、マレー人売春婦が増加する原因となっている。これらの背景が、カンボンの社会や経済生活を解体する原因となっている [魯 1959: 51]。

マラヤの農業を新たな発展段階に引き上げうる機会として、ルーは、1956年7月に設立された連邦土地開発庁 (Federal Land Development Authority, FELDA) に期待する。マラヤの国土の5分の3は未開墾であり、土地資源を計画的に有効に開発することが喫緊の課題だと指摘する。土地を有効に活用することにより、増加する労働者人口を吸収する雇用の受け皿を作り、大量の失業者を出すような深刻な事態を回避し、社会を安定させることができるとルーは述べる [魯 1959: 206]。

これに関してルーは、1913年に導入されたマレー人保留地の非マレー人への開放を求めた。マレー人保留地はマラヤ全土の4分の1を占め、その大部分が森林のまま、豊富な錫鉱床を有する可能性があり、保留されたままだと開発に不利であるとする。米の生産増強が叫ばれているなかで、華人もマレー人に劣らず稲作に長けているが、一部の土地がマレー人保留地となっているため、華人が土地を取得して開墾することができず、そのことがマラヤの水田面積の拡大を阻害しているとする。ルーは、農村の商業や零細な小規模商売はほとんど華人が握り、華人はマレー人とその他の民族を仲介する存在であるため、華人こそがマレー人を経済活動に接合できるとする [魯 1959: 64]。

ルーはマレー人農村の開発の必要性を、工業化の必要性と同様に、人口増加という観点からとらえていたことがわかる。受益者のほとんどがマレー人であるRIDAやFELDAによる事業を、マラヤ全体の発展という観点からルーは肯定的にとらえ、政府による一層の支援を求めた。また、農村のマレー人を商業的な農村経済に接合するうえで華人が仲介できると述べ、マレー人社会の問題解決に華人が積極的に介入することを肯定的にとらえていた。

おわりに

『マラヤ』全体を通じて顕著であるのは、マラヤ半島、シンガポール、スマトラ島、ジャワ島などの間で人々が活発に行き来するマラッカ海峡地域における流動性の高さである。著者であるルー自身が1920年代から少年期および青年期を通じてこれらの地域を渡り歩き、1948年によりやうくシンガポールに居を構えることとなった。『マラヤ』の主要テーマの一つであるマラヤにおけるマレー人社会の形成は、ジャワ島やスマトラ島、スラウェシ島などからの人口流入の結果として論じられる。『マラヤ』では、中国や南アジアを出自とする人たちのマラヤへの流入と定着の過程も論じられ、とりわけ古代から華人がマラヤの建設に寄与してきたことが強調される。

マラッカ海峡地域で人々は移動を続け、ルーと同様に、偶然の成り行きもあって人生のある段階でどこかに定住を決めた。1923年生まれのルーは1940年代から1950年代にかけて家族を設ける年代となり、マラッカ海峡地域で植民地期が終わり国民国家

の創成期に移行する時代と重なっていた。その中でルーは、インドネシアの自然の豊かさや美しさ、ハイリル・アンワルがけん引者の1人であったマレー語・インドネシア語文学、出自や民族を問わずインドネシア語で意思疎通し、思想や哲学、芸術について語る青年文芸サークルなどをこよなく愛しながらも、独立戦争期のインドネシア社会の混乱に失望していた。偶然の成り行きで家庭を設けるに至ったシンガポールは1959年当時まだイギリスの植民地にあったが、ルーは、シンガポールが近い将来マラヤ連邦と統合して独立を果たすことを夢見ていた。1957年に独立したマラヤ連邦は、独立に際して大きな社会的な混乱もなく、独立1周年を平和裏に迎えた。その平和を維持するために、ルーはペンを執り、自らはシンガポールを拠点としながら、マラヤが平和で豊かな社会となるように歴史を記述し、現状を分析し、開発戦略を展開した。

東南アジアは1970年代以降、本格的に開発の時代に入る。ルーが開発戦略の執筆に力を入れているのは、開発の時代の到来を予兆させるものでもある。しかし「カラムの時代」に書かれたルーの開発戦略は、文芸を通じた思想や哲学といった側面もまた重視するものであった。ルーが敬愛するハイリル・アンワルの作品が日本占領期およびインドネシア独立戦争期にインドネシアで人気を博したのも、ルーがそれら作品を生涯の心のよりどころとしているのも、危機の時代こそ思想や哲学が必要とされ、文芸活動もまた必要となることを示している。このことは現代に生きる私たちにとっても示唆するところが大きいだろう。

参考文献

- 貞好康志 2016『華人のインドネシア現代史——はるかなる国民統合への道』木犀社。
- 篠崎香織 2020「1950-60年代のシンガポールにおける華語文芸世界とマレー語文芸世界との交差」光成歩・山本博之編『「カラム」の時代XI——マレー・イスラム世界の女性と近代』CIRAS Discussion Paper No.92、京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.61-74。
- 篠崎香織 2021「マレー世界における華語作家の国家構想——ルー・ポーイエと1940年代のインドネシア文芸界」光成歩・山本博之編著『「カラム」の時

代XII——マレー・イスラム世界の社会変容と女性』CIRAS Discussion Paper No.101、京都大学東南アジア地域研究研、pp.61-69。

篠崎香織 2022「女性の活躍に託す新たな秩序構築——日本占領期・インドネシア独立期を舞台としたルー・ポーイエの小説」光成歩・山本博之編『「カラム」の時代XIII——マレー・イスラム世界における移動とジェンダー規範』CIRAS Discussion Paper No. 106、京都大学東南アジア地域研究研究所、pp.50-57。

Cliford, Hugh, and Frank A. Swettenham 1895 *A Dictionary of the Malay Language: Malay-English Part 2: The Letter "B"*, Taiping: printed for the authors at the government Printing Office.

Dennys, N.B. 1894 *A Descriptive Dictionary of British Malaya*, London: London & China Telegraph Office.

Lee Kam Hing 2007 "A Key Man behind the Alliance", *The Star*, 30 Jul, <https://www.thestar.com.my/opinion/letters/2007/07/30/a-key-man-behind-the-alliance/>.

Ng Wee Nee 2023 *Lu Po-Yeh: Daripada Etnik Kepada Bangsa*, Petaling Jaya: Strategic Information and Research Development Centre.

Ooi Kee Beng 2020 *As Empires Fell: the life and times of Lee Hau-Shik, the First Finance Minister of Malaya*, Singapore: ISEAS – Yusof Ishak Institute.

Rangoon Road School 1953 *Souvenir Magazine*.

Swettenham, Frank A 1896 *Vocabulary of the English and Malay Languages with Notes*, London: W.B. Whittingham.

Vaughan, J.D. 1879 *The Manners and Customs of the Chinese of the Straits Settlements* (Reprinted in 1974 by Oxford University Press, Kuala Lumpur).

Wilkinson, R.J. 1901 *A Malay-English Dictionary, Part I (Alif to Za)*, Singapore: Kelly & Walsh.

Winstedt, Richard 1969 *Malaya and Its History*, 7th Edition, reprinted. London: Hutchinson.

Tan Chee Beng 1988 *The Baba of Melaka: Culture and Identity of a Chinese Peranakan Community in Malaysia*, Petaling Jaya: Pelanduk Publications.

Zulkifli B. Lubis 2005 "Kajian Awal tentang Komunitas Tamil dan Punjabi di Medan: Adaptasi dan Jaringan Sosial", Paper presented at the Shared Histories Conference, Penang, Malaysia, 30 July 2003 - 3 August 2003, organised by Penang Heritage Trust.

魯白野 1959『馬來亞』星洲：星洲世界書局。

魯白野 1960「印尼文学講座」『南洋文摘』12, pp. 8-22。

魯白野 1970『實用馬華英語大辭典 增訂本 1970年

10月版』星洲：星洲世界書局。

魯白野(周星衢基金編注) 2019a(1953)『獅城散記——新編注本』新加坡：新加坡周星衢基金。

魯白野(周星衢基金編注) 2019b(1954)『馬來散記——新編注本』新加坡：新加坡周星衢基金。

魯白野 2019c(1953)「峇峇社会」、魯白野(周星衢基金編注) 2019a『獅城散記——新編注本』、pp. 132-134。

魯白野 2019d(1953)「鬼故事」、魯白野(周星衢基金編注) 2019a『獅城散記——新編注本』、pp. 279-281。

魯白野 2019e(1954)「作者原序」、魯白野(周星衢基金編注) 2019b(1954)『馬來散記——新編注本』、24-25。

魯白野 2019f(1954)「峇峇的文学」、魯白野(周星衢基金編注) 2019b(1954)『馬來散記——新編注本』、333-337。

馬華文学電子図書館 2024「姚紫(鄭夢周)」<https://www.mcldl.com/author/read/311>。

威北華(張景雲編) 2016『威北華文芸創作集』Petaling Jaya: 有人出版社。

威北華 2016a「橋」、威北華(張景雲編) 2016『威北華文芸創作集』、pp. 221-228。

威北華 2016b「晚會」、威北華(張景雲編) 2016『威北華文芸創作集』、pp. 316-322。

威北華 2016c「戰俘」、威北華(張景雲編) 2016『威北華文芸創作集』、pp. 350-354。

星衢基金 2019「魯白野(1923-1961)紀事年表」、魯白野(周星衢基金編注) 2019(1953)『獅城散記——新編注本』、pp. 27-30。